

2 為替レートはなぜ動くのか？

円＝ドル・レートと円＝ユーロ・レートは、毎日、ニュース番組のどこかで必ずアナウンスされます。実は、ニュース番組では天気予報並みの常連コーナーです。なぜでしょうか？ それは、為替レートが時々刻々と変化するからです。

為替レートはなぜ変化する？

- ⇒ 為替レートは「ドルの（円で測った）価格」である
 - ＝肉や魚の値段と同じように、為替レートもモノの値段のひとつ
- ⇒ 肉や魚の値段は、買いたいという人と売りたいという人の相対的大小によって動く
- ⇒ ドルの価格も、「ドル」を買いたいという人（需要）と売りたいという人（供給）の相対的大小によって動く

たとえば今、1ドル100円で、ちょうどドルを売却したいという人と購入したいという人が一致していたとする。

何らかの理由で、売却希望と購入希望のバランスが崩れると…

ドルを購入したい人 > ドルを売却したい人

- ⇒ 多少高い価格（たとえば1ドル105円）でもドルを入手しようとする
- ⇒ ドルの価格が上昇（＝為替レートが上昇）

ドルを購入したい人 < ドルを売却したい人

- ⇒ 多少安い価格（たとえば1ドル95円）でもドルを売ってしまおうとする
- ⇒ ドルの価格が下落（＝為替レートが下落）

一般に、モノやサービスの値段（以降は「価格」と呼びます）は、それを購入したい（需要）という人と売却したい（供給）という人の相対的な関係によって決まると考えられています。そして、相対的に需要のほうが大きければ価格は上昇し、相対的に供給のほうが大きければ価格は低下すると考えられます。これを、「モノの価格はそれに対する需給によって決まる」と言います。

では、ドルを買いたい人が多くなる（少なくなる）のはどんな時で、反対にドルを売りたい人が多くなる（少なくなる）のはどんな時なのでしょう？

言い換えれば、ドルへの需要とドルの供給とは、どのような要因に影響されるのでしょうか？

これがわかれば、これから為替レートが上昇していくのか低下していくのか予想がつかます。また、為替レートが上昇しているときに、裏で何が起きているのか予想を立てることも可能になります。

👉 テーマ1 「為替レートはどう決まるのか？」

*円高, ドル高, 円安, ドル安

為替レートの上昇

例: 1 ドル 100 円 → 1 ドル 120 円

① ドルの立場から見ると…

1 ドル出しても 100 円しか入手できなかったのが, 120 円入手できるようになった.

=ドルの価値が上昇している ⇒ **ドル高**

② 円の立場から見ると

1 ドル入手するのに 100 円出せばよかったのが, 120 円出さなければならなくなった.

=円の価値は低下している ⇒ **円安**

ドル高と円安は同じことを指している

同じひとつの減少を, ドルから見ると・円から見るとの違い

為替レートの下落

例: 1 ドル 100 円 → 1 ドル 90 円

① ドルの立場から見ると…

1 ドル出しても 100 円入手できたのが, 90 円しか入手できなくなった.

=ドルの価値が低下している ⇒ **ドル安**

② 円の立場から見ると

1 ドル入手するのに 100 円出さなければならなかったのが, 90 円出せばよくなった.

=円の価値が上昇している ⇒ **円高**

ドル安と円高は同じことを指している

3 為替レートが動くときどのような影響が？

この講義のもうひとつの重要なテーマは、為替レートの動きを制御すべきかどうかというものです。こう聞くと、多くの方は「為替レートが動くときまずいの？」と思うでしょう。以下の2つの例を用いて、為替レートが動くことの影響を考えてみましょう。

(1) 為替レートが動く = 輸入品の円建て価格が変化する

為替レート上昇 (1 ドル 90 円 → 1 ドル 92 円)

⇒ アメリカからの輸入品の円建て価格上昇：50 ドルの商品は 4,500 円から 4,600 円に。

⇒ アメリカからの輸入の減少

⇒ アメリカは売れないのに以前と同じようにつくるわけにはいかない

= アメリカの生産の減少

⇒ つくらないのに以前と同じように雇うわけにはいかない = **アメリカの雇用の減少**

同じことを日本から見ると…

⇒ 日本からの輸入品のドル建て価格低下：50 ドルで売っていた製品を、49 ドルで売れるようになる¹。

⇒ アメリカへの輸出増加

⇒ 売れるので以前より多くつくるようになる = 日本の生産の増加

⇒ 多くつくるので、以前より多く雇うようになる = **日本の雇用の増加**

このように、ある条件のもとで為替レート変動は、ある国から雇用を奪い別の国の雇用を増やすような「再分配効果」を持つ可能性があります。

⇒ 時に、為替レートは国際政治上の重要な議題となる。

(2) 為替レートが動く = 将来の為替レートが現時点でわからない

次のような例を考えてみましょう。

日本人・田中氏：

手元にさしあたり使う予定のない 1000 万円を持っている。

誰かに貸して利子を稼ぎたいが、不況の日本では利益の出るプロジェクトがなく、適当な借り手がいない。

アメリカ人・スミス氏：

¹ 1 ドル 90 円するとき、製品を 50 ドルで輸出すると、 $90 \times 50 = 4500$ 円の収入が得られます。1 ドルが 92 円になると、同じ 4500 円の収入を得るには約 49 ドル ($= 4500 \div 92$) で売ればよいことになります。

アメリカは好況なので、10万ドルあれば1年後に12万ドルの売り上げを得られるようなビジネスチャンスを持っている。

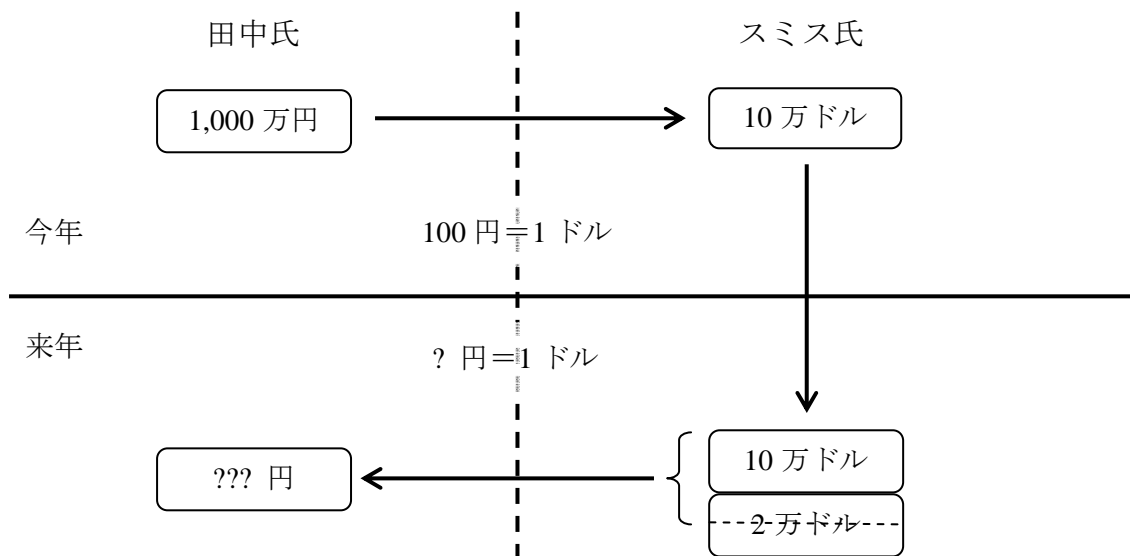
しかし、さしあたりビジネスをはじめめる現金を持っていない。

2人が次のような取引をしたらどうか？

- ① 田中氏が10万ドルをスミス氏に貸す。
- ② スミス氏が1年後に12万ドルの売上（つまり2万ドルの利益）を得る。
- ③ 田中氏に10万ドルを返し、さらに利益のうち1万ドルを利子として払う。残りの1万ドルを自分が得る。

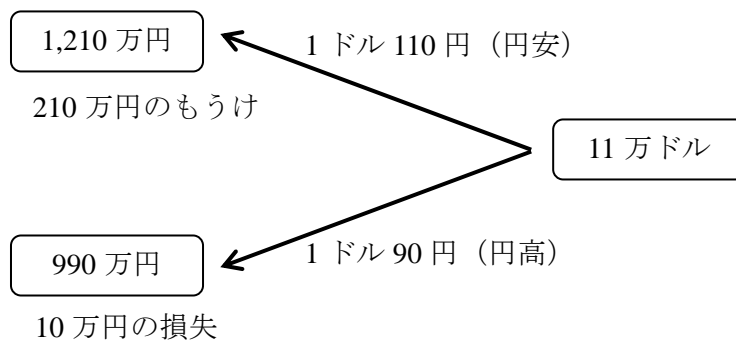
⇒ 2人とも、取引前より多くのキャッシュを得ている。

⇒ はたしてこううまくいくか？



1年後、田中氏のもとに11万ドルが返ってくることは確定しているが、来年の為替レートがわからないので、円で見えていくらのお金が返ってくるのかが現時点でわからない。

下図のように、1年後に為替レートが円安（ドル高）に振れば利益は大きくなるが、円高（ドル安）に振れると損失が出てしまう可能性がある。



ビジネス自体は収益を上げるものであっても、為替レート変動によっては円であって損をしてしまう可能性もある。

⇒ 損失の危険を怖れて、田中氏はスミス氏にお金を貸すことを躊躇し、スミス氏はこの有望なビジネスを実行できないかもしれない。

⇒ 田中氏・スミス氏ともにより多くのお金を手に入れるチャンスがあるのに、それが実現されないかもしれない。

⇒ 社会にとって損失

為替レート変動が、経済あるいは我々の生活にどのような条件のもとで、どのような影響を及ぼすのか、厳密に考察する必要があります。

☞ テーマ 2 「為替レート変動は経済にどのような影響を与えるのか？」

4 為替レートを固定する：固定相場制

為替レートが動くことで問題が生じるのならば、動かないようにすればよいのでは？

実は、各国が採用している為替レート制度は大きく 2 種類あります。

(A) 変動相場制：為替レートの決定を市場に任せておく＝為替レートは自由に変動する。

(B) 固定相場制：為替レートをある特定の値に固定する

どうやって為替レートを固定するのか？

たとえば、政府が 1 ドル 360 円で為替レートを固定しているとすると、

何らかの原因で需要・供給が変化して為替レートに市場で変更圧力が加かったとき、政府はいかにしてその圧力を消滅させるのか？

ドルへの需要のみが増大する場合（ドルの供給は不変）

⇒ ドルを買えない人が出てくる

⇒ 360 円を超える価格でもドルを買おうとする人が出てくる

⇒ 放っておけば、為替レートが上昇しようとする（円安・ドル高圧力）

⇒ 政府が、欲しい人にはいくらでも 1 ドルを 360 円で売ってやる

⇒ 360 円を超える価格でドルを買おうという人はいなくなる

⇒ 1 ドルは 360 円に保たれる

ドルの供給のみが増大する場合（ドルの需要は不変）

- ⇒ ドルを売りきれない人が出てくる
- ⇒ 360 円を下回る価格でもドルを売ろうとする人が出てくる
- ⇒ 放っておけば、為替レートが下落しようとする（円高・ドル安圧力）
- ⇒ 政府が、売りたいという人からいくらでも 1 ドルを 360 円で買ってやる
- ⇒ 360 円を下回る価格でドルを売ろうとする人はいなくなる
- ⇒ 1 ドルは 360 円に保たれる

以上より、為替レートを固定するために政府は…

- (1) 「360 円でいくらでもドルを売ってやる」のに十分なだけのドルを持たなければならない。
- (2) 「売りたい人がいればいくらでもドルを買ってやる」ことで、ドルを大量に保有する覚悟を持たなければならない。

- ⇒ ドルへの需給のいかなる変化にも対応するだけの「準備」が必要
- ⇒ それなりの「副作用」を伴う
- ⇒ 為替レートの固定には良い面（便益）と悪い面（費用）の両方がある。
- ⇒ 実際、世界には、変動相場制をとる国と固定相場制をとる国の両方が存在している。特に途上国には固定相場制を採用する国が圧倒的に多い²。

為替レートを固定することのメリットとデメリットを厳密に考察する必要があります。

👉 テーマ 3 「固定相場制の便益・費用は？」

固定相場制のデメリットはそのまま変動相場制のメリットになります。

たとえば、固定相場制を採用する政府は上記のような「準備」をしなければならず、これが「費用」ということになりますが、変動相場制を採用する場合はこのような準備は不要で、これ自体が「便益」になります。

したがって、固定相場制を学ぶことは変動相場制を裏から学ぶことにもなるのです。

² どの国がどのような為替レート制度を採用しているかについては、IMF（国際通貨基金）が毎年発行している *Annual Report on Exchange Arrangements and Exchange Restrictions* が詳しい。

5 なぜ各国は異なる通貨を使うのか？：通貨統合

為替レートが存在するのは、各国が異なる通貨を使っているから。

⇒ 同じ通貨を使えばよいのでは？

⇒ これを実践に移したのが、欧州諸国。

1999年1月1日、ユーロ誕生。欧州通貨統合。

⇒ そもそも、世界の多くの国はなぜ互いに異なる通貨を使っているのか？

⇒ それぞれの国が独自の通貨を持つことのメリット・デメリットは？

複数の国が共通の通貨を採用することのメリット・デメリットは？

☞ テーマ4 「通貨統合の便益・費用は？」
＝「独自の通貨を持つことの費用・便益は？」

ユーロ誕生以前、多くの経済学者が欧州通貨統合の合理性に否定的だった。

＝ 純粹に経済的費用・便益の観点からは、ユーロは選択され得ない政策。

⇒ なぜ選択されたのか。通貨統合の政治的・政治経済学的な影響を考察する必要。

☞ テーマ5 「通貨統合の政治的・政治経済学的意義は？」

欧州以外の地域における通貨統合の可能性は？

世界がいくつかの共通通貨圏にまとまっていく可能性は？

☞ テーマ6 「国際通貨システムの将来」